阡陵

No.6

関西大学考古学等資料室彙報
昭和57年11月1日発行

人物埴輪（関東地方出土）

目 次

博物館とフィールド・ワーク……………2
横田健一教授寄贈の銅鏃……………3
スカラベ……………4
サービス至上主義への疑問……………6
溝の中の土器……………7
本山彦一翁と考古学…その4（本山文庫）……………8
水中考古学事始……………10
資料室資料紹介……………11
編集後記　他……………12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06―388―1121)

博物館とフィールド・ワーク

横田健一

フランスの社会人類学者クロード・レヴィストロースは、その著『構造人類学』(Claude Lévi-Strauss《Anthropologie structurcfurale》1958. Paris)の第17章で人類学の教育の仕方について論じ、人類学の専攻課程を大学に設置し教育することはもちろんであるが、その研究と教育のために学生にフィールド・ワークをやらせることと、さらに博物館の必要を説いている。そして博物館はフィールド・ワークの延長であるという意味のことをいっている。

これは文化人類学や民俗学、考古学をはじめ、動物学や植物学、地質学、地理学等についてもいえることである。これらの科学では、フィールドに出て、資料の実態の観察、発掘、蒐集、記録を行うことが研究に不可欠の作業であることはいうまでもない。

しかし、その蒐集された資料を研究室に持ち帰って整理し、復原し、体系づけることが、その次に必要な研究の段階である。そして更に他地方の類似の資料や研究報告と比較し、その体系づけをより広汎にわたって行うことが必要となる。

その段階において、他地方の資料の実物を出来るだけ、実地に即して、観察することが望ましい。実地というのは、考古学についていえば資料の出土地の実況、たとえば古墳ならば、古墳出土の遺物のみならず、古墳の実況を現地に行って観察し、またすでに先人が実測したような場合でも、実測し直すことが必要なばあいもあることや、その現地の環境を再認識することが必要なことを意味するのである。だが、これはなかなか限られた時間では行い難いことである。

その点で博物館に、できるだけ多数の地方の、多種多様な資料を蒐集し、体系的に展示せられて比較検討に便なように陳列されることが必要であり、望ましいことはいうまでもない。

フィールド・ワークは、個々の特殊なケースの認識を深め、博物館は体系的、普遍的な認識を深めるものとして、互いに補完し合うものといえよう。

東京国立博物館の表慶館は、全日本の主要な考古学上重要遺跡出土品を蒐集し、それを展示して比較研究の便宜を与えている点で、貴重な博物館である。かっては日本の主要遺跡の出土品は、東京国立博物館に差し出すことが、義務づけられていたからである。

レヴィストロース (1908〜)

しかし、この長所は一方において欠陥を伴う。それはその出土遺物が、出土遺跡と切り離されてしまうからである。遺物は出土遺跡との密接な関連において観察されてこそ、生々と生命を得て来る。現地に遺跡博物館が必要なゆえんである。たとえば上総の金鈴塚には、その出土遺物を展示した小博物館があり、古墳の現地に立って、この墳の被葬者が、この金色燦然たる装身具を身につけたのか、とうい感慨を実感できるのである。私は中央に全国の出土遺物を集めるならば、それはレプリカを集めればよいと思う。

千葉県佐倉に歴史民俗博物館が、いよいよ開館される。これはかなり前から計画され、日本学術会議は、そのために全国的に設置場所はどこがよいかアンケートを求めた。私は当時、会員であった井上智勇先生（当時京大教授、現名誉教授）に、これは絶対に大都会、特に大地震の被害を受けやすい東京は不可であり、人口の少い、延焼の被害の少い野外、郊外にすべきだと進言した。全国から貴重な資料を一堂に集め、1923年の関東大震災のように、一朝にして全焼したならば、日本中に貴重な遺物の実物がなくなってしまうからである。博物館は、地方に現地主義に即して建設すべきであり、地方に多くの博物館を作るのがよい。

その一方で、レプリカを比較できる博物館を作れば、これまた教育上、有益であろう。大学博物館は両者を兼ね合わせた性格を有するものといえる。

横田健一教授寄贈の銅鏃

網　干　善　教

昭和57年５月10日、本学文学部横田健一教授からら考古学資料として銅鏃２本の寄贈をうけた。この銅鏃は横田教授の義父が御所蔵になっていたものを御逝去後形見として受領され、今回同教授から本学に寄贈されたのである。出土地については「伝大宰府か」ということであるが定かでないとのことである。

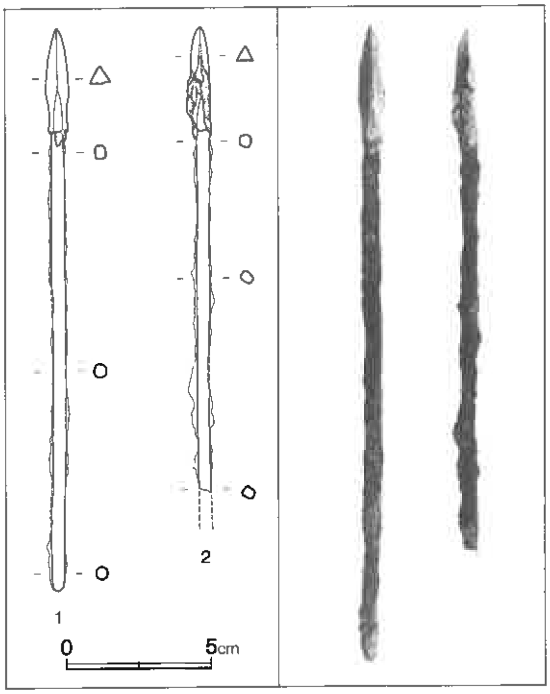
この銅鏃は鏃身が青銅製であり、鉄製の長い茎（なかご）を付す。２本のうち１本は総長19.5cm鏃身3.6 cm、鉄茎15.9cm、他の１本は総長16.2cm鏃身3.6 cm、鉄茎12.6cm、鉄茎部は径約0.5 cmの断面円形をなす。青銅製の鏃身部の断面は正三角形状で、所謂「三角鏃（三稜鏃)」と称され、銅鏃に鉄茎を付した鏃は中国では「銅鏃鉄鋌」または「銅首鉄鋌鏃」と呼ばれる。

今回寄贈をうけた銅鏃と同型式のものが本学考古学資料として２本を所蔵している。これは旧本山コレクションにあったもので『本山考古室列品目録』のNo.348、「銅製三角鏃（鉄茎）支那出土（西村氏寄贈)」と記されたものである。

鏃身の形態、構造を観察すると、極めて堅刃であり、鋭利であって、刺突力の大きい実用的な銅鏃であるといえる。

この型式の銅鏃の中国での主な出土例を挙げると、戦国時代後期では1965年10月24日から同月28日までに発掘調査が行われた燕国の墓葬である河北省易県燕下都44号墓（『考古』1975年第４期）にみられる。さらに1976年５月下旬から８月まで発掘調査が行われた西安の秦始皇帝陵東側第２号兵馬俑坑の発掘調査簡報（『文物』1978年第５期）の「銅首鉄鋌鏃二件」のなかに「Ⅱ式鏃、Ｔ２出土、現長14.6厘米、其中首長2.7厘米、形状仍為三角形、鉄鋌為円形、残断」とあり、第14図４に挙げられた「Ⅱ式鉄鋌銅鏃」がこれに相当する。

また同じ始皇陵近傍の臨潼県の秦俑坑試掘の簡報（『文物』1975年第11期）にもⅣ式銅鏃鉄鋌が挙げられている。



(実測図)　　銅　鏃

さらに前漢代から王莽期にかけては漢長安城武庫遺址から発掘された銅鏃（『考古』1978年第４期）の「Ⅱ式二十多件」のなかに「鉄鋌長34厘米（図４の５)」に挙げられたものが類似する。

以上のような所例からすれば、この銅鏃鉄鋌と称される三角鏃（三稜鏃）は戦国時代後期から後漢（東漢）の初期頃までに製作し、使用されたものであることが推察できる。今回寄贈をうけた銅鏃は型式からみて秦から前漢代頃のものと考えてよいだろう。

なお、銅鏃鉄鋌の場合、鏃身と茎がどのように連接されているかという問題については明確に判断できない。ところで本学では工業技術研究所（所長亀井清教授）を中心として、工学部山田幸一教授を委員長に「関西大学古文化財保存科学研究会」が発足し、広く学際的な視野に立って研究をすすめることになった。そこで早速この銅鏃のレントゲン撮影等科学的な技術を使用して研究の一助にしようと試みている。

スカラベ

加藤一朗

スカラベという言葉は英語のscarabからきているが、今日ではもう日本語として定着しているといっても過言ではないであろう。それは、写真（4例）に見られるように、石・貴石・ガラス・陶土などを素材とし、甲虫の形に造られた古代エジプトの護符である（阡陵№５の「エジプトの護符」の項参照)。裏面（腹面）に文字や図柄・模様・文章などが彫られているものが多く、しばしば印章（seal）としても用いられた。それゆえスカラベを一語で説明すれば「聖甲虫型印章」ということになる。なぜ「聖甲虫」であるのか。この疑問は、本小稿を読み進まれるうちにおのずから解かれよう。

すでに原始時代からエジプト人は諸種の甲虫を尊び、守護の力をもつものと考えていたらしく、先史時代の墓から、たくさんの乾燥甲虫（甲虫のミイラ？）を詰めた壺や、石に彫られた甲虫が出土している。歴史時代に入るとその尊崇は一層進んだ。これには理由がある。ある種の甲虫は家畜の糞をまるめて大きな球を作り、その中に卵を生みつけ、一対の脚（後脚）でその球を高だかとかかげて巣にもちかえり、卵はかえるとまわりの糞を餌として成虫になった。この現象に注目したエジプト人は実にこの球を太陽（または太陽神）のひながたとみなした。そこでこの種の甲虫は神格化されてケプリ神（太陽神の一つの姿）となり、それはまた太陽、とくに東の地平線から日々生れ出る朝方の太陽と同一視された。またエジプト人は、この甲虫の上述のような子孫作りは、雌の力をかりずに雄だけで行われるものと誤解していた。このためかれらはこの生殖行為と、女神の力をかりずに自分一人の手で天地・万物を生み、子孫を作った男神アトゥムの行為とを同一視したので、ケプリ神は造物主アトゥム神とも同化した。（そしてケプリ神と語源を同じくするケペルという動詞は「生成する」といういみをもつようになった。）そしてさらにこの神は「神々の父」とよばれるようにもなったのである。したがって、エジプトの甲虫型護符のモデルとしてはこの種の甲虫が主流となったのもむしろ当然であった。この結果、英語ではdungbeetle（糞甲虫）とよばれるこの種の

表　裏

A　B　C

甲虫を、ギリシア人やローマ人は、エジプト人の尊崇を斟酌して、「聖甲虫（ラテン語でscarabaeus sacer)」とよんでいた。また古代エジプトで作られたスカラベの数は実におびただしいもので、あるエジプト学者は「古代エジプト人の間におけるスカラベは、今日のキリスト教信者たちの間の十字架のようないみをもつていた」とさえのべている。さてこれらのスカラベの裏面に刻まれた沈め彫りのモチーフであるが、これはもう千差万別といってよい。一般論としては、比較的年代の古いものは護符的な要素が強く新らしいものは印章的な要素が強いとされており、また文字だけが刻まれたものや文字と模様とが併記されているものは意味づけが容易なのであるが、図柄のみのもの、とくに幾何学模様のみのものについては、エジプト学者たちの間でも解釈がまちまちである。したがって、本稿の中の筆者による写真の説明の部分も試論的なものであるというふうに理解していただきたい。

現存するスカラベの中でもっとも数の多いのは王名、とくにトトメス３世の名を記したものである。同王はシリア・パレスティナを征服してエジプト帝国を建設した勇将であって、おびただしい数にのぼる同王名を記したスカラベの製造と配布とは、新聞・ラジオなどのマスコミの手段の存在

しなかった当時において王の威信を天下に知らしめる絶好の手段であったことには疑いがないが、これを身につける一般人にとっては、神とあがめるファラオ（王）の守護を期待するよすがであったにちがいない。つぎに多いのが私人の官職名と名とを記したもので、これらは印章として用いられることが多かったと考えられる。ちなみにエジプトではこれらの印章にインクをつけて紙に捺印するという習慣はなく、印章は、ブドー酒や油の入った壺の蓋をおおう粘土とか、倉庫の扉の閂をおおう粘土とか、パピルス紙の巻物をしばった紐の結び目をおおう粘土とか、要するに粘土の上に封印のいみをもつ押型を残すために用いられた。

さて**写真A**の裏面にはワニと人物が刻まれている。ワニはエジプト語でセベクといい、これが個人名に用いられた例は珍らしくない。それゆえ、無理に解釈すれば、このスカラベを「セベク氏の印章」とすることも不可能ではない。しかし、このワニの書き方は一般的な個人名の書き方とはほど遠い。やはりこのワニは造化の神セベクであって、このスカラベはセベク神の守護を願う護符とみる方が自然であろう。**写真B**（裏）は、両端にファラオの一化身であるコブラ女神が刻まれ、中央の人物はロータス（エジプト蓮）の茎をにぎりその花の香りをかいでいる。このようなロータスの香りをかぐ人物の姿は、貴人の墓内の壁画によく見かける図柄である。そこで筆者はこのスカラベを「２柱のコブラ女神に守られながら、ロータスの芳香をかぎつつ、永遠の生命を楽しむ人物の図」と解し、エジプト人特有の強い来世信仰とむすびついている護符というふうに考える。**写真C**（裏）は全くの幾何学模様である。難解至極であるが、筆者としては一応暫定的解釈として、これもまた来世信仰のよすがとされたものとしておきたい。しかし確言はできない。そもそもエジプトの象形文字文献の中には隠語的なものが含まれているといわれており、スカラベの幾何学模様も、その各部分が何らかの意味を蔵する暗号と考えているエジプト学者が少なくない。しかしその暗号の解読は未だしである。現在のエジプト学の段階ではこのような幾何学模様は今日天文学者たちの論じている宇宙間のブラック・ホールのような謎を秘めているものというべきか。**写真D**は全体として甲虫そのままの形をしているので、ケプリ神そのものを型どった護符と考えて宜しいであろう。

D

以上にふれたほか、大型のスカラベの中には「歴史的スカラベ」、「ハート（心臓）のスカラベ」とよばれるものがある。前者は「某王の治世何年目にどこそこで狩りが行われた」というような文章が記されている。後者はミイラの胸の上におかれたもので、死後の「オシリスの裁判」（阡陵No.４の「オシリス神小像」の項参照）のときに役立てようとするものである。腹面に「私のハートよ、どうかウソをつかないでおくれ、私をうらぎって、私が生前悪業をなしたなどといわないでおくれ」といったいみの、「死者の書」の第30章が刻まれている。このほか左右両側に鳥の翼をそなえた、特殊な形のスカラベがある。この場合には甲虫が全く太陽神と同一視されているのであって、両翼をもつ太陽円盤という太陽神表現の１モチーフを借用しているのである。

なお「歴史的スカラベ」が史料として重要な意味をもっていることはいうまでもないが、意味不分明な幾何学模様のスカラベを含めて、すべてのスカラベを、背面・側面の形体学的研究と復面の刻字・刻紋の比較研究とから、製作年代順に分類する研究も進んでいるのであって、スカラベが直接・間接にエジプト史研究上の重要な資料となっていることを付記しておきたい。いいかえると、あるエジプト学者がいったように、エジプト史研究上スカラベは、ギリシア史やローマ史などの研究におけるコイン（貨幣）の役割り、つまり古銭学（numismatics）的な意義をもっているのである。

サービス至上主義への疑問

谷沢永一

戦後の図書館界を毒して来たのは、押しつけ慇懃無礼のサービス至上主義である。進駐軍に扈従して来たアメリカ流の理想主義者が、住民に奉仕する連邦地域図書館の理念を、一方的に吹聴して行った余弊であろうか。日本とアメリカは国情が違うのに、抽象的な原則だけを機械的に当て嵌めると、肝心の効用が忘れられて齟齬を来たす。

第一には開架方式への過大な重視。極端まで走ると全館を開架にするのが、民主化の達成であるとまで誤認する、本末顚倒も甚だしい珍論さえ生じた。館員が自己の存在理由を、御時勢に合わせて浮き足立ちながら、誇示せんと無意識に短絡した結果である。

図書館の機能は二方面を挙げ得る。より根本的には文化財の保存と整理、その為には無闇に公開すべきではなく、相当程度の閉鎖性は止むを得ぬ措置だ。猫に小判の貴重文献まで一律均等、有象無象の御覧に供する必要はない。古典籍と迄は言わぬが明治期の新聞雑誌が、悪平等によって現に甚大な被害を受けたのである。

収蔵および研究を旨とする本格派と並行して、簡便な閲覧用の図書館は是非とも心要であり、もっと全国的に細かく増やして行くべきなのだが、両者の機能を峻別しない一元論は困る。私が提唱したいのはターミナル図書館で、自治体や企業や出版界が出資を分担し、ビジネスマンや家庭婦人が手軽に貸り出せる、消費型の図書館を立地条件に即して、僅かのスペースを生かすよう努めればよい。

大学図書館は同時に両方の機能を、歪つな偏りなく果して行かねばならぬのだが、研究以前と言うべき消費向きの側面に、重心を傾けては存在理由を損う。大学図書館が学生に対して発揮すべき効能は、おのがじし学生に読書の魅力を自覚させ生涯に亙る読書の習慣をつけさせる事なのだ。大学図書館は在学生および卒業生に、自腹を切って本を買う性癖を養う為にある。学生に本を買わずに済ませる便利を提供する為に、大学図書館が待ち受けていると考えてはならぬ。サービスのシステムも度が過ぎては、乳母日傘の縮少型モラトリアム人間を育てるのみであろう。

戦後の図書館界を毒した病弊の第二は、レファレンス・サービスを以て生産的と思い込む独り善がりである。恰も戦前には衆議院の上に貴族院があった如く、出納サービスよりも格が上で遥かに望ましい職能を、レファレンス・サービスに見出す夢見る人達が出現した。研究者の御要望に応じて文献の密林を、親切に案内してあげましょうとの御慈悲である。私は此の傾向を戦後的な喜劇の一つに数える。

レファレンスの専門を以て自任する輩が、頼りにするのは要するに既成の書誌である。しかし世に出ている書誌を力で探し出せないような奴は、少なくとも学問のプロとは言えず、当世風に形容すれば学界のブリッ子である。いちいち相手にする必要はない。タダめしを食わせて放って置けばよく、時間潰しの御相手をする必要はさらさら無い。

もしレファレンスの御担当が独自の作業で、書誌を編纂したのなら隠し持たずに、公表して万人の利用に供すればよい。そのとき私どもは書誌学者として歓迎し、その学恩に深く謝意を表するであろう。

すなわち書誌学者は独立の学究として業積を示せ。そうでなく既成の書誌をあれこれ出し入れ、全国の電話番号簿を並べて悦に入っている程度のレファレンス気取りは無用にして滑稽にして邪魔である。ボランティアとしてなら御苦労とでも一揖しようが、そうでない場合は単なる人件費の無駄使いに過ぎない。

博物館および美術館に詳しくない私としては、止むを得ず図書館界に寄せる呟きを以て、御指名の主題から逸脱する非礼をお詫び申し上げる。

溝の中の土器

石野博信

弥生時代や古墳時代の集落跡を発掘調査すると必らず溝が出てくる。集落をとりまく幅３～５ｍ深さ１ｍ余のものから、集落の中をはしる幅１ｍ余、深さ30cm前後のものなど様々である。水野正好氏が、〝「オレとオマエの間にはミゾができた」と言う言葉は、縄文時代のものではなく、弥生時代以降の意識である〟と言われるほど溝が多い。溝は、水路であるとともに自と他を区画し、自を結合する機能をもつ。

大阪府池上遺跡では、弥生時代中期に径300ｍ～350ｍの環溝をもっている。その一部、幅４ｍ余、深さ１ｍ余、長さ20ｍ余（Ｂ溝―ＳＦ075）からの出土品はつぎの通りである。

土器	20,000点余
木器	300点余
石器	2,000点余

土器は、壺・甕がそれぞれ40％程度で、他は鉢、高杯などの日常容器類である。

木器は、鍬、鋤、石片の柄などの農工具類が33％ともっとも多く、ついで高杯、鉢などの容器類が17％あり、紡績具も12％と比較的多い。祭祀的な性格をもつ、鳥や男性性器を象った木彫が９点出土しているのは特異である。

石器は、石庖丁や石斧、石鉢などの農工具類が62％ともっとも多く、ついで（石鏃のすべてを武器とすれば）石鏃、石槍などの武器類が37％を占める。

土器・木器・石器を一括すれば、

日常容器　49％　　農工具　36％

武器　14％　　祭祀具　１％となる。

集落をとりまく環溝は、必要であるからこそ掘削されたはづである。池上遺跡の環溝も大きく３回の掘り直しがあり、埋没するとその外側に全く新たに掘削し直しているほどである。それほど必要な溝に何故〝もの〟を投棄するのであろうか。出土品をみると単なる投棄ではないように思われる。これていない壺や甕つくりかけの鍬（完成品に仕上げることができる）、ムラの祭りに使用したと思われる鳥や男根の木彫―祭りに使ったものをムラのまわりの溝に棄てるのか。600点に近い石鏃―もし、すべてに矢柄がついてたとすれば大変な量である。河内王朝ともよばれる古市古墳群の中の野中アリ山古墳で1600本余の鉄鏃が埋納されていて驚かされたが、それに匹敵する。

農村の共同溝さらえ（奈良県）

奈良県纒向遺跡

池上遺跡では、弥生時代中期末には環溝は埋没し、新たに掘削されることなく、ムラは衰退に向ったという。環溝が必要とされている間は、おそらく年に何回かムラ人総出で溝さらえが行なわれたであろう。溝の中に様々なものが投棄されていたとしても、その多くはこの時に溝外に出されたはずである。それなのに何故、これほど多くのものが……。

それは、溝が不必要になったとき、――ムラを棄てるとき、あるいはムラの主だった人々が新村へ移つるとき、盛大な儀式ののちに他と区別し、自らの結合のシンボルでもあった溝を埋めたのか。

弥生・古墳時代の集落で溝の中に多量の土器などが含まれているのは池上遺跡だけではなく、多くの遺跡に認められる一般的な傾向である。多くのムラで同じような現象があったのだろうか。溝を発掘するとき、溝さらえの痕跡を確かめ、どの層位に遺物が多いかを確かめなければならない。また、環溝や区画溝のすべてから一様に出土するのか、特定部分に多いのか、出土地点によって遺物の種類に差はないか、などを確かめ、積重ねることによって、何故埋められたかが明らかになってくるだろう。

いま、４月。外では耕運機の音がひびいている。そろそろ、村総出の溝さええがはじまるだろう。私もよそ者ながら参加する。草、棒キレ、茶椀のカケラ、ジュースの空カン、ビニール袋……が溝の中からひき上げられる。ムラに近い溝、離れた溝、通勤路に沿う溝等によってひき上げられるものの種類と量に差がある。今年も数えてみよう。

本山彦一翁と考古学　…その4…

（本山文庫について）

角田芳昭

「明治10年米人モールスによって“大森貝塚„ががが発掘され、新聞紙上に掲げられた記事により、考古学等に対する趣味を覚えた」と大正９年の本山翁の手記に見えるが、その後、藤田組の支配人となった明治19年頃より､社交上の必要から美術・工芸・刀剣等にも興味を持ち始めたのであった。また、これらを研究する必要から、この頃より諸々の図書・文献の蒐集も始められたようである。

本山翁の没後遺族の方々のご好意により、考古学・民族学等資料約１万点を関西大学が購入することになった。これと同時に蒐集されていた書籍等も本学がそのまま譲り受けることになり、その１割程の約800冊が一括して購入された。そして「本山文庫」と名付けられ図書館に所蔵されているものである。歴史、美術、工芸等貴重な文献も多く、また、そのほとんどが和装本である。この中より若干を紹介してみたい。

『大日本金石史』全５巻（付図１）が所蔵されているが、これは木崎愛吉（好尚）翁の名著であるが、この著の出来た後、この原稿ともいうべき多数の梵鐘類、碑石類、金口、金具類の拓本が本山彦一翁へ譲られ、本学が所蔵している。この中には国宝に指定され、拓本類を容易にとることも出来ない貴重な資料が多く存在する。『集古十種』85巻は松平定信の編纂したもので、鐘銘・碑銘・兵器・銅器・楽器・文房・扁額・印章・法帖・古画の十種で当時実在の実物を模写し､題記・所在・寸法を記したもので、収載総数2100余点で、考古資料図録の集大成として注目されるべきものである。『扶桑鐘銘集』(上中下３冊）は京都の儒者岡崎信好の編で安永７年の初版本である。本編３巻、付録１巻、５畿内の安永以前の鐘銘を本編121､付録48に収める。藤貞幹の『好古目録』『好古小録』も所蔵され寛政板である。その他元文板官准『本朝軍器考』『同付図』､『泉布統志』乾隆37年活版本30巻､『唐土訓蒙図彙』享保戊戌仲春板14冊本（唐国に関する百科辞書とでもいうべきもの）などを所蔵する。また、建築関係本として『日本古建築精華』は箱入豪華３冊本であり、大正８年12月毎日新聞記者岩井武俊氏によって編集されたもので、特別保護建築物全集であり、約1000点の写真を入れ資料価値の高いものである。「城図集」として日本各地の名城の地図24図を収している１帖本がある。関東常州土浦城図より南は肥前島原城図まであり、これには「干時享保八年発卯書く」とある。これらは平面図や鳥かん図、色彩をを入れた立体図もかかれており、資料としても研究価値の高いものである。また中世の「千早城跡画図」「金剛山系古城之図」など多く加彩された珍らしい資料もある。

本山文庫

国文学関係書の中で珍らしい文献は『千種日記』である。これは江戸より京までの地理を実歴したもので、全12巻本で、本学のものは第７巻で、道頓堀歌舞伎見物より堺をえて高野山詣までの日記で文久３年（1863）の写本である。写本が全国で内閣文庫にのみ所蔵されているもので貴重な写本である。(図版参照）また、米沢侯上杉鷹山の書いた『老がこころ』『桃の若葉』の２書を『婦道訓』として、本山彦一翁の父君義堅老が娘嘉女（彦一翁の姉）の嫁入りの時書き写して送られた書があり、先考真蹟彦と署名し、その後へ本山彦一の捺印をしている。嘉永２年の書写である(図版参照)

多数の本山文庫の文献の中で特に『武家装束・典例叢書』『兵法・合戦・軍事叢書』『射術・馬術等武術叢書』の三大叢書は他に類例のない貴重書であり、天正年間より幕末までに書写されたものである。この中には未公開の資料も多く存在しているものと推定されるので、活字本として発行される日がまちどおしい。

本山翁は書画蒐集に関しても苦心を払われており、多数の名画を蒐集されていたが、現在これら

は散逸してしまっている。しかし、多数の図譜類は残されている。『本朝画史』(元禄6年版一陽居翁述、和装上下巻)『扶桑畫人傳』(明治16年、古筆了仲編、全五冊)『日本画人彙傳』(明治43年、石田誠太郎編、全7冊) 等は日本画家研究の必読書と思われる。また、南画家の画譜・画帳類も多く、『竹田先生畫譜』『渡辺華山遺墨』『関雪散民畫集』『翠雲畫譜』『秀畝花鳥画譜』『草壁画集』『都路華香墨蹤』『豪谷畫莽遺墨集』などの珍らしい目録が所蔵されている。この他古美術品図録などの図録も所蔵する。『義士大観』と題する画帳があるが、これは著名な赤穂義士を題材にしたもので、大正10年に描かれたものである。当時の著名な画家47名と各界の名士47人により、画と賛をなしており、珍らしい画帳である。画家川合玉堂より古洞、松園、関雪清方、深水、未醒に至る画47景と、犬養毅、後藤新平、佐々木信綱、高浜虚子、東郷平八郎、渋沢栄一、原敬に至る各界の名士の賛がある。殿中の争闘より凶変の急報、伏見の夜雪、山科の隠栖をえて、吉良邸討入、細川邸の切腹までの47景を描いている。おりしもＮＨＫ放送テレビにおいて赤穂を題材とした「峠の坂道」が放送されているので何かの参考にと紹介した。

『大観作品集』という豪華図録集がある。近代画家の個人別図録集が少ない現在貴重な資料である。これは横山大観が東京美術学校を卒業し、大正14年までに制作した著名な絵画57点の図録である。日本美術院を背負って立つ大家として不動の地位をしめた頃で、大正14年日本美術院発行で、この画集のため、久邇宮邦彦親王が次の如く詠われている。「丹青妙手奪天工、水墨揮毫淡雲籠、占得顧張王陸法、正逢泰運挙国風」そして、「謹呈本山彦一大人　大観」と見返しに揮毫している。美術学校卒業制作「村童観猿翁図」絵画協会銅牌「無我」第5回絵画共進会銅牌「屈原」明治末年3月菱田春草君追悼展覧会「五柳先生」そして大正元年10月の「瀟湘八景」へと続く57点は圧巻である。

図録における白眉はなんといっても昭和5・6年に発行された嘉納治兵衛氏の『白鶴帖』5冊である。嘉納白鶴翁の長年にわたって蒐集された書畫、陶磁器、中国銅器など5冊の豪華目録でありまた大型本の和装である。図録であると同時に美術品としても評価されうるものであろう。題字は長尾雨山であり、堂々とした達筆である。この資料は現在兵庫の白鶴美術館に寄贈され展示されている。

以上の如く本山文庫における文献は貴重な資料が多数あり、内容によっては未発表の資料も存しているのではないかと推定される。一応の整理はできており図書館資料カードには書名のみは記入されている。冊数にして約800冊程度であるが利用価値の大きい財産である。この調査にあたり図書館の肥田晧三氏に多大の貴重な助言を得た。ここに感謝申し上げる。

千草日記（高野山記）

婦道訓（本山義堅老書写）

水中考古学事始

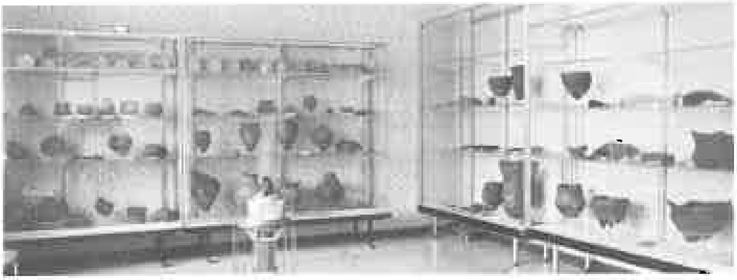
近年「考古学」という言葉は一般化され、それについての関心も深く、知識も豊富になってきた。また、考古学も数段の進歩をとげ、全ゆる分野の学問の協力をえて研究されるようになった。すなわち人類学、考古学、歴史学等の研究者に加えて、自然科学の諸分野の研究者にもその専門知識と手法を用いて、研究されるようになった。金属学者による青銅製品の分析及び材質調査、岩石工学より見た石器等の材料材質研究などの技術史考古学、植物学者の古代植物の研究、中世・近世の港湾や製鉄遺跡など生産遺跡の解明における「産業考古学」(Industrial Archaeology)、あるいは海底や湖底の遺跡及び発見遺物を解明研究する「水中考古学」(Underwater Archaeology) などである。特にこの「水中考古学」と名付けられている考古学は新しい研究分野の学問であり、わが国においては端緒についたばかりである。そこでこの水中考古学について若干解説し、今後の調査の参考にしたいと考える。

水中考古学とは「考古学の１ジャンルであり池・湖沼・海底など水中遺跡を学術的に調査研究し解明する学問である」とでも定義されるであろう。近年環境破壊という言葉が多く使われるが、わが国の内陸の湖沼や列島接岸部においても盗掘や荒廃という環境の変化が起こされている。早急に独自の方法において調査し保存対策を考えなくては水底文化遺産が永遠に失われることになるであろう。

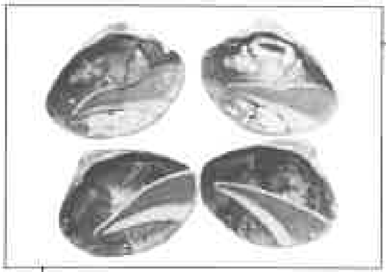
この分野においては海外において秀れた研究業績があり、また、参考文献や研究報告が多数発行されている。1854年、スイス湖沼地帯で異常寒破のため河川が凍結し、水面が下り、湖底につきささった木の杭が多数あらわれ、調査の結果新石器時代より青銅器時代の湖上住居址であることが判明したが、これが水中考古学の端緒といわれる。1928年から４ヵ年かけたムッソリーニ政権によって引き揚げられた「ネミ湖のローマ船」は水中考古学としての貴重な業績である。第二次大戦後、1943年、フランス海軍のＪ・Ｙ・クストーによってアクアラングが発明され、人間の水中活動が自由になると、これを使用し多くの水中資料の解明が始まり、近代水中考古学の幕あけとなったのである。クストーも沈船発掘で多くのギリシャ彫刻やアンフォラ（ギリシャ陶器）を引き揚げた。その後1961年スウェーデンの大戦艦ワサ号（1400トン）の引き揚げ、そして先般昭和57年９月のニュースとなった、英国ポーツマス沖より引き揚げられた16世紀ヘンリー八世の旗艦メアリー・ローズ号(600トン)などは水中考古学の学問的成果である。

わが国の水中考古学史をみるとき、江戸時代以前には特記すべき資料はなく、ある書物に剣や珍貴な古器物が水中より発見された、と記載されている程度である。明治も中期の26年『湖上及海上住居の時代について』と題し、坪井正五郎が『東京学芸雑誌』137号で論じたのが、これに関する嚆矢であろう。明治41年10月長野県諏訪湖底から石鏃が発見されるにおよび、坪井の説の一つのよりどころとなり、「諏訪湖底石器時代遺跡」と名付け、前述したスイスの湖上住居址に類以するものとした。大正年間に八幡一郎、鳥居龍蔵博士らは漁具を使い同湖底より土器片、骨格器、哺乳動物骨、魚歯や木炭片を多数発見し、「水底遺跡」とした。昭和に入り、藤森栄一氏らにより学術的調査が行なわれ、次第に解明されるに至った。また大正13年、琵琶湖の北端湖北町の対岸葛籠尾崎の東沖６㎞で漁民が縄文・弥生の土器２点と土師器２点を引き揚げたのがきっかけで、琵琶湖の水底遺跡が調査されるに及び、現在では10数ヵ所、遺物の単独発見場所は60数ヵ所にわたっている。また、奈良県橿原市唐古の池底遺跡、広島県福山市草戸千軒遺跡なども水中考古学の範疇に加えても良いと考える。

この他にわが国においては網走湖底遺跡、浜名湖弁天島湖底遺跡、和歌山沖紀淡海峡の友が島の北方「イカ場」遺跡、香川県内海町「水の子岩」海底遺跡、島根県「鴨島沈島」調査、長崎県北松浦郡「鷹島」海底学術調査など近年の調査において、その成果があり今後の大規模な学術調査が期待されている。本学においてもこの水中考古学の調査研究の話が持ち上った。次回よりその計画について述べたい。参考文献―水中考古学入門（小江慶雄著）―〈角田芳昭〉



琵琶湖葛籠尾崎遺跡より引き揚げられた土器(湖北町公民館展示)〔産報デラックス・99の謎より〕

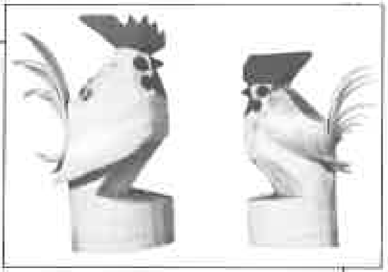


貝合

貝合せは、左右２組に分れていろいろ珍らしい貝を出し合わせ、それに歌をよみそえて優劣を競う遊戯です。平安時代より起り、「山槐記」と「袋草紙」に応保２年(1162)３月の禁中で行なわれた貝合せの記録がある。それによると数日前より左右に別れて、神社に祈祷し、当時の誦経や装束などについて協議した（日本歴史大辞典：河出書房）。のちに貝覆を貝合せともいった。貝覆は360個の蛤の貝殻360個を使って遊ぶ。ひとつの蛤の２枚の貝の内側にそれぞれ金箔に源氏絵など極彩色で描かれており、おのおの殻を二分して一方を地貝、他方を出貝と称し、地貝を中央の空所におき、出貝を選んで多く合せとった者を勝とする遊びである。写真の資料は蛤に源氏絵を書いたもので、八角で蓋付の貝桶の中に入れられており、貴重な資料として教育研究に活用されている。

資料紹介

郷土玩具



民俗資料の中に日本各地の「郷土玩具」31点が所蔵されている。北は青森県弘前市の「下川原鳩笛」から、南は九州熊本県肥後の「木葉猿」に至るものである。

郷土玩具という言葉は大正時代初期頃より使われ始められ、それ以前は土俗玩具、地方玩具、大供玩具などとも呼ばれており、江戸時代から明治・大正時代にかけて、日本各地に発生し育てられ引き継がれ、作り続けられている「おもちゃ」を郷土玩具といっている。

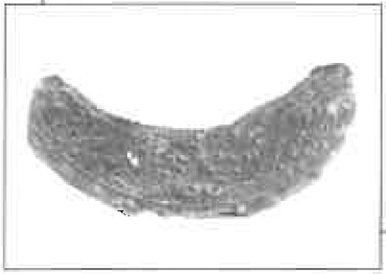
この「にわとり」は山形県米沢市の笹野一刀彫で1100年前坂上田村麻呂が東夷を征伐する際に戦勝を祈願した千手観音の開基と共に笹野彫が起ったと伝えられ信仰玩具として、伝承されているものである。米沢地方は豪雪、積雪地帯で冬期間は戸外の仕事からしめ出される農家にとっては恰好の副業で、千年もの間、親から子へ、孫へと家内相伝され、独特のテクニックによって笹野彫の風格を一段と高めている。この他各種の鳥類が彫られている。

軒平瓦

瓦には丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、鬼瓦、鴟尾などがある。これは軒平瓦で、長門国分寺址より出土したものと記されている。本学所蔵の古瓦類は破片等を加え数百点あり、朝鮮、中国本土のものも含まれる。

最近の寺院址の発掘調査により、古瓦の研究は急速に進み、その文様、意匠から、各地域の特性や時代はおおよそ解明されるに至っている。下関市教育委員会「長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ」に報告されている出土軒平瓦とこの資料は同様であり、同寺より出土したことに間違いないと思われる。文様は中心より左右に蔓草が波状にのび、２ケ所に結節をもち、外側に移るにしたがい唐草文様が肉太となってくる。その外側に連珠文を配する。

長門国分寺は８世紀の中頃創建され、北に長門鋳銭所跡があり、南に乃木神社、忌宮神社等がある長門国府跡の中心である。この資料も創建時に製作されたものと思われる貴重な資料である。



資料紹介

軒丸瓦

これは北朝鮮の高句麗時代の軒丸瓦である。「大正２年平壌」と墨書されており、初期７世紀頃のものと推定される。色調は酸化炎による赤褐色を呈しており、焼成も良好である。蓮蕾を用いた蓮華文であり、外区を連珠文で飾っている。直径14.5cmである。

朝鮮瓦塼図譜Ⅱ高句麗（井内古文化研究室編）図159～161と同様の文様であり、平壌府出土と記されているので、この資料も北朝鮮平壌出土と断定して良い。この資料の特徴を見るに周縁は思いきり高く、その内側に接して珠文を配し、中央に饅頭形の隆起を置き、これを中心に瓦当面に蕾形の蓮華により６区に分けている。この時代の貴重な資料である。

本学にはこの他、咸鏡北道文字平瓦、文字塼、鬼面瓦、唐草文軒平瓦も所蔵している。韓国慶州出土の蓮華文軒丸瓦、百済時代の瓦も所蔵しており、教育研究活動に利用されている。

資料貸出状況

57．5　坩　堝（下関市長府町出土）　3点
　　　鞴　口（　〃　）　3点
　　　銭　笵（　〃　）　15点
　　　池田市教育委員会「歴史のまち池田」展へ

57．9　銅　鐸（寝屋川市四條畷出土）　1点
　　　青銅製鈴（出土地不詳）　8点
　　　筒形銅器（盾塚古墳他）　3点
　　　三 環 鈴（出土地不詳）　2点
　　　五鈴杏葉（　〃　）　2点
　　　五鈴鏡、三鈴杏葉、六鈴釧、馬鈴、鈴付土器（出土地不詳）　各1点
　　　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　「音の考古学」展へ

57．9　須 恵 器（隠岐飯ノ山横穴出土）　7点
　　　勾　玉（　〃　）　10点
　　　管　玉（　〃　）　2点
　　　島根県立八雲立つ風土記の丘「島根の古代」展へ

新収資料

下記の資料の寄贈を受けた。ここに感謝申し上げる。
昭和57年5月10日　**銅 鏃　2点**（伝太宰府出土）**横田健一氏**（本学文学部教授）（3ページ参照）

資料室近況

関西大学創立100周年が4年後にせまってきた。このため当資料室では100周年記念出版として「所蔵資料図鑑」の発刊を計画し、このたび専門家による第1回目の資料写真の撮影を終えた。主に縄文土器を中心に撮影したが、これらを中心に弥生・古墳時代の資料を加え、また、学術的研究と学史研究をとり入れ、4年計画で編集していきたいと考えている。法人および諸先生方の援助とご指導をお願い申し上げます。

編集後記

年間2回発行予定で編集を続け、ここに3年目、第6号をお届けいたします。内外国際情勢多難な折「阡陵」のみは学術文化の振興に寄与すべく頑張っていきたいと存じます。

「博物館学課程20周年記念特集号」もおかげをもち好評を博し残部僅少です。ご希望の方はご連絡下されば送付いたします。（1部4,500円、郵送料350円）。今回も横田、網干、加藤先生に続いて執筆していただき、その他文学部谷沢永一教授、奈良県立橿原考古学研究所研究部長石野博信氏（本学非常勤講師）の玉稿もいただいた。ここに感謝申し上げる。

表紙の「**埴輪**」は関東地方出土のもので、古墳時代7世紀頃のものである。左手を胸に、右肩に鍬と思われる器物を担った形態を表現しているが、欠損しているので定かでない。腰刀を帯び、円形耳飾を着装している。顎に粘土を貼り付け、威厳を示しているようにも見受けられるので、村の長(おさ)かとも思われる優れた造形の埴輪である。現在高42.4cm

《角田芳昭》

関西大学考古学等資料室彙報　No 6　昭和57年11月1日　発行
関西大学考古学等資料室　編集
㈱原多成文社　印刷